

# 青年期後期における仲間集団経験発達による 攻撃性の中和化の違い

高田 毅

健康科学大学 健康科学部 福祉心理学科

Development of peer group formation as a determinant of  
aggression neutralization in late adolescence

TAKADA Tsuyoshi

## 要 旨

本研究では、青年期後期において年齢相応の仲間集団経験発達をしていないピアシップを發揮できない群とピアシップを發揮できる群でどのように攻撃性の様態が異なるのかを検討することを目的とした。質問紙調査の検討 ( $n=139$ ) から、ピアシップが發揮できている者は攻撃性を中和化して用いることができる傾向にあることがわかった。仲間集団発達と攻撃性の取り扱いの関連性を示す結果となった。一方で、内集団と外集団を区別する意味はあまり支持されず、社会的比較についての理論仮説はさらなる検討が必要である。

キーワード：攻撃性，仲間集団発達，青年期後期

## I. はじめに

攻撃性と性衝動を自我の支配下におけるようになることは青年期の重要な課題である。しかし、近年目立つのは自己破壊的行動や攻撃性の暴発の問題である。一方で、攻撃性を押さえ込んでしまう過剰な抑圧や抑制の問題もある。そこに見られるのは攻撃性をうまく取り扱えないという共通点である。Freud<sup>4)</sup> はリビドーと攻撃性という欲動の二元論を提唱し、Hartmann<sup>6)</sup> が攻撃性の中和化の概念を提唱した。中和化されることによって脱本能化したときに攻撃性は主張性や能動性、野心といった形で<sup>2)</sup> 成長促進的なエネルギーとして自我が用いることができる。

攻撃性のエネルギーを現代青年はどのように手なづけるのかについて、小谷他<sup>13)</sup> は健常青年を対象とした「アイデンティティグループ」という集団精神療法を応用した実験装置の中での知見から

考察している。その特徴として (1) 怒りを表現できない：否認・抑圧がよく見られる。(2) 他者の攻撃性同様に自分の攻撃性を扱うのが下手：他者の攻撃性を経験するのを避け、自らの怒り・攻撃性さえも避ける。(3) 自らの主張性よりも順応性といった依存性：自分の個性を表現するよりも、グループ全体では自分を隠す傾向。(4) 集団生活における貧しい人間関係能力：友人の間での情緒の交換が避けられ、現実からの逃避が起きる。もしくはシゾイドのような反応が身についてしまうことなどを指摘している<sup>14)</sup>。つまり、仲間集団経験発達不全、攻撃性の発達不全が臨床群に限らず健常群でも顕著になっている。

仲間集団と攻撃性の関連についての研究として、Gavin & Furman<sup>5)</sup> は同性同輩友人グループの認知の発達的变化をTajfelやFestingerの社会的アイデンティティ理論や内集団・外集団研究の

枠組みを用いて検討した。前青年期を 5-6 年生、青年期前期を 7-8 年生、青年期中期を 9-10 年生、青年期後期を 11-12 年生と定められた。青年期前期・青年期中期に集団の重要性が高まり、グループメンバーが新たなメンバーに開かれている程度を指す「集団の透過性」は低まり、グループメンバーが互いの行動や服装を気にし合っている程度を指す「同調性」は高まるが、これらが青年期後期には前青年期と同等のレベルに戻ることが示された。また、内集団・外集団ともに敵意的な行動をする程度に関して、青年期前期・青年期中期が前青年期・青年期後期より高いという結果であった。

青年期前期の攻撃性の高まりは社会心理学的にも精神分析発達理論においても指摘されている。一方、攻撃性の高まりが仲間集団の質との関連で検討された研究はほぼ皆無に等しい。ただし、Gavin & Furman<sup>5)</sup>の結果は、内集団・外集団ともに敵意的な行動をする程度に関して、青年期前期・青年期中期が前青年期・青年期後期より高いという結果であった。これは青年期前期の第2次性徴による性衝動の高まりとそれによりリビドーと攻撃性のバランスが崩れることによると考えられる。またそれに関連する不安への防衛としての集団で群れる現象が起こる。<sup>12)</sup> 自尊心を保つための行動として社会心理学でいうところの内集団・外集団の社会的比較の現象が顕著になる。その結果、内集団には集団への同調性を作るためにメンバーへの攻撃性が潜在する。時には黒い羊効果のようにあからさまな排除すら起こる。その際、外集団には集団のメンバーであることの境界をひくために攻撃性が使われると考えられる。

しかし、青年期後期になるとこれらの攻撃性の高まりは収まる。これは集団同一性の発達<sup>7)8)9)10)</sup>や青年期の正常な発達課題から考えると、仲間集団発達が進んでいれば自分自身の中に内在化された集団表象を想起することで自尊心や気分を保てるようになり、独自性や個別性を保つことができる。本論では、ピアシップを保坂・岡村<sup>11)</sup>のピアグループで特徴とされた、内面的にも外面的にも互いに自立した個人としての違いを認め合う共存

状態として定義する。

また、内集団と外集団の社会的比較のために攻撃性を用いる必要性は少なくなると考えられる。したがって、内集団と外集団での攻撃性の違いは少なくなると考えられる。ピアシップを発揮することで、集団内で自分と対象がそれぞれ互いに独自性を持った1人の個人として存在するようになり、その中で攻撃性とリビドーの交換が行われるようになる。その経験が積み重なる中で成熟していき、やがて般化される。内集団に限らず外集団でも攻撃性が中和化されると考えられる。

一方、Gavin & Furman<sup>5)</sup>の示した、人気のある集団に所属することが大事な青年は外集団への攻撃性が高まったように、集団表象が内在化できない青年は実際の集団所属による社会的アイデンティティや所属感によって自尊心を保とうとする。独自性や個別性よりも所属感による社会的アイデンティティに頼る。また、社会的比較のプロセスが起こり外集団への攻撃性は高まると考えられる。これらの攻撃性は中和化されないと考えられる。そのため、破壊性を持ち、主張をすることが攻撃をしてしまう恐れと感じられたり、中和されない攻撃性の投影の結果として、攻撃される恐れとして体験されてしまう。このとき、内集団では、互いの違いを認めるよりは一体感が強調されるので、攻撃性とリビドーの交換に抑制・抑圧が生じる。したがって、攻撃性やリビドーの表現はそれほど磨かれずに表現・表出されると考えられる。

まとめると、以下が理論仮説となる。ピアシップを発揮することができない群では内集団での同質性が強いのが特徴であり、社会的比較に頼るので、外集団には直接攻撃性が向かう。一方、内集団では同調がメインとなり攻撃性は行動としては抑制されるが、潜在的にはそのまま残っているので攻撃性は高く中和化されない。同質性が強い集団では攻撃性の表現は抑制・抑圧がかかり磨かれず、社会的比較による中和化されない攻撃性に頼っているので、ピアシップを発揮することができない群には攻撃性を中和するのは難しいだろう。

一方、ピアシップを発揮できる群では、社会的比較のために攻撃性を用いる必要もなく、攻撃性の取り扱い能力が内集団で磨かれるので攻撃性を内集団・外集団関係なく、中和化して、能動性や主張性といったより適切な形で表現できるであろう。したがって、攻撃性は抑制・抑圧されず、主張性のような形で表現される。

本研究では、青年期後期において年齢相応の仲間集団発達をしておらず、ピアシップを発揮できない群とピアシップを発揮できる群でどのように攻撃性の様態が異なるのかを検討することを目的とする。その際、攻撃性の破壊的な側面だけでなく発達促進的なエネルギーの側面にも注目する。

## II. 方法

### 仲間集団経験発達の測定

榎本<sup>3)</sup>の友人関係の活動的側面を測る尺度 29項目を使用した。この尺度は4つの下位因子からなる。①相互理解活動 8項目：保坂・岡村<sup>11)</sup>のピアグループに相当すると榎本<sup>3)</sup>はしている。②親密確認活動 9項目：保坂・岡村<sup>11)</sup>のチャムグループに相当すると榎本<sup>3)</sup>はしている。③共有活動 8項目：保坂・岡村<sup>11)</sup>のギャンググループに相当すると榎本<sup>3)</sup>はしている。④閉鎖的活動 4項目の4つの因子から構成される。答えは「1:まったくしない」から「6:とてもよくする」までの6件法で採点され、各因子項目の合計得点がそれぞれの因子得点として算出される。①相互理解活動因子はピアシップ得点、②親密確認活動因子はチャムシップ得点、③共有活動因子はギャングシップ得点とする。この尺度の信頼性・妥当性は特に記載されていない。

表 1

友人関係の活動的側面を測る尺度<sup>3)</sup>

#### 相互理解活動

- |   |                          |
|---|--------------------------|
| 1 | これからの生き方や人生観などについての話しをする |
| 2 | 自分の性格や行動についての話しをする       |
| 3 | 将来についての話しをする             |
| 4 | お互いの欠点や長所の話しをする          |
| 5 | 意見が違うときに納得するまで話し合う       |
| 6 | 喜びや悲しみを分かち合う             |
| 7 | 自分の趣味についての話を             |
| 8 | お互いに不満に思っている点を言い合う       |

#### 親密確認活動

- |    |                         |
|----|-------------------------|
| 9  | トイレに一緒に行く               |
| 10 | 教室を移動するときは一緒に行く         |
| 11 | 交換日記をする                 |
| 12 | 自分の悩みや日頃の出来事を手紙に書いて交換する |
| 13 | 一緒に登下校する                |
| 14 | 一緒に勉強する                 |
| 15 | テレビ番組の話しをする             |
| 16 | 好きなタレントや歌手の話しをする        |
| 17 | 一緒に習い事に行く               |

#### 共有活動

- |    |                   |
|----|-------------------|
| 18 | 部屋の中でファミコンやゲームをする |
| 19 | お互いの家で一緒に遊ぶ       |
| 20 | 何となく家に集まって時を過ごす   |
| 21 | 休日に出掛ける           |
| 22 | 自転車に乗ってぶらぶらする     |
| 23 | 一緒にゲームセンターに行く     |
| 24 | 外で遊ぶ              |
| 25 | 一緒にスポーツをする        |

#### 閉鎖的活動

- |    |                     |
|----|---------------------|
| 26 | カラオケに行く             |
| 27 | ポケベルなどでメッセージを送りあう   |
| 28 | 特に用事もないのに電話で長く話しをする |
| 29 | お昼を一緒に食べる           |

### 攻撃性の測定

安藤他<sup>1)</sup>の日本版 Buss-Perry Aggression Questionnaire: 日本版 BAQ, 24項目を使用した。この尺度は4つの下位因子からなり, ①身体的攻撃(身体的な攻撃反応)7項目(うち1項目は無関項目), ②短気(怒りの喚起されやすさ)5項目, ③敵意(他者に対する否定的な信念・態度)7項目(うち1項目は無関項目), ④言語的攻撃(言語的な攻撃反応)5項目から構成される。答えは「1:まったくあてはまらない」から「5:非常によくあてはまる」までの5件法で採点され, 各因子項目の合計得点がそれぞれの因子得点, 因子得点の合計が攻撃性得点として算出される。

この尺度の信頼性と妥当性に関しては次の通りである。ノミネート法による基準関連妥当性, P-F スタディの結果から収束的妥当性・弁別的妥当性・構成概念妥当性が確認されている。4つの下位因子の $\alpha$ 係数は.70から.78の間にあり, また全攻撃性尺度の $\alpha$ 係数は.81であり内的整合性もほぼ満たされている。またテスト-再テストの相関係数は9週間間隔で.75以上, 17週間隔で, 60以上の相関係数を得ており, 安定性も高いと言える。

内集団と外集団で現れ方が違うことが予想されるので, 同じ質問を親しい友人の場合と親しい友人以外の人の場合を別々に実施した。親しい友人を内集団に対する攻撃性, 親しい友人以外を外集団に対する攻撃性を指すものとする。

表2

日本版 Buss-Perry Aggression Questionnaire<sup>1)</sup>

身体的攻撃	
1	なぐられたら, 殴り返すと思う
2	挑発されたら, 相手をなぐりたくなるかもしれない
3	権利を守るためには暴力もやむをえないと思う
4	人をなぐりたいという気持ちになることがある
!	5 かつとなって, ものを壊したくなることがある
* 6	どんな場合でも, 暴力に正当な理由があるとは思えない
* 7	相手が先に手をだしたとしても, やりかえさない
短気	
8	かつとなることを抑えるのが難しいときがある
9	ばかにされると, すぐ頭に血がのぼる
10	いらいらしていると, すぐ顔に出る
11	たいした理由もなくかつとなることがある
12	ちょっとした言い合いでも, 声が大きくなる
敵意	
13	友人の中には, 私のことを陰であれこれ言っている人がいるかもしれない
14	私を嫌っている人は結構いると思う
15	陰で人から笑われているように思うことがある
!	16 人とよく意見が対立する
17	嫌いな人に出会うことが多い
* 18	私を苦しめようと思っている人はいない
* 19	人からばかにされたり, 意地悪されたと感じたことはほとんどない
言語的攻撃	
20	友達の意見に賛成できないときには, はっきり言う
21	自分の権利は遠慮しないで主張する
22	意見が対立したときは, 議論しないと気がすまない
23	誰かに不愉快なことをされたら, 不愉快だとはっきり言う
* 24	でしゃばる人がいても, たしなめることができない

注) \*逆転項目, !無関項目



## 作業仮説

理論仮説に基づいて、質問紙の構成と対応させた上で次のように作業仮説を設定した。

①非階層クラスター分析で相互理解活動・親密確認活動・共有活動・閉鎖的活動を変数としたときにピアシップ得点が高い群とチャムシップ得点が高い群が少なくとも抽出されるだろう。

②攻撃性の方向と下位因子の種類を被験者内要因とし、性別と抽出されたクラスターを被験者間要因とする 4 要因混合計画における分散分析において、クラスターの主効果が有意で、チャムシップ得点が高い群が、ピアシップ得点が高い群より高くなるであろう。

③友人関係の活動的側面を測る尺度の下位因子である、相互理解活動・親密確認活動・共有活動・閉鎖的活動の 4 つを説明変数とし、攻撃性の下位因子である、身体的攻撃・短気・敵意・言語的攻撃の 4 因子を目的変数とする重回帰分析を目的変数ごとに行ったときに、内集団・外集団における攻撃性得点の下位因子である言語的攻撃得点は相互理解活動得点によって予測され、その標準偏回帰係数は正の方向に有意であろう。

## Ⅲ. 結果

### 調査時期と配付方法

2006 年 12 月に、A 私立大学において、手渡しによる配付と授業の時間を利用した一斉配付を行った。学部生・大学院生で 30 歳までの未婚の青年期後期を対象とした。330 部を配付し、143 名分を回収した。回収率は 43.3% であった。不備のあるものを分析対象から外し、139 名分（男性：52 名，女性：86 名，記入なし：1 名）を分析対象とした。平均年齢は 21.4 ( $SD=2.3$ ) 歳であった。

### 尺度項目の確認

すべての項目に対して天井効果・フロア効果の確認をするために、平均値 ± 標準偏差の値がその項目の最大値、最小値を超えていないかのチェックを行った。その結果、友人関係の活動的側面を測る尺度<sup>3)</sup>の親密確認活動項目である項目 9 (トイレと一緒に行く)、項目 11 (交換日記をする)、

項目 12 (自分の悩みや日頃の出来事を手紙に書いて交換する)、項目 17 (一緒に習い事に行く)、共有活動項目である項目 18 (部屋の中でファミコンやゲームをする)、項目 23 (一緒にゲームセンターに行く)、内集団に対する日本版 BAQ の身体的攻撃の因子、項目 17 (人をなぐりたいという気持ちになることがある)、項目 19 (権利を守るためには暴力もやむをえないと思う) にフロア効果が見られ削除対象とした。

ただ、本研究ではこれらの項目を削除しても親密確認活動項目 5 項目、共有活動項目 6 項目、内集団への身体的攻撃項目 4 項目が残っているので、これらのフロア効果を起こした項目を削除して分析を続行する。

次に項目の一貫性を確かめるために、各項目と合計得点の相関係数 (I-T 相関) を確認した。その結果、友人関係の活動的側面を測る尺度では I-T 相関はすべて有意であった。また、内集団への攻撃性では項目 24 ( $r=-.58, n.s.$ ) が有意ではなかった。また外集団への攻撃性の項目では、項目 21 ( $r=.12, n.s.$ ) と項目 23 ( $r=.16, n.s.$ ) が有意でなかった。ただし、この項目は言語的攻撃を測るためには必要な項目であると考え、削除しないものとする。

次に、各尺度が本当にその尺度の想定した下位因子に属しているかを確かめるために、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を友人関係の活動的側面を測る尺度、内集団に対する日本版 BAQ、外集団に対する日本版 BAQ に対して行った。その結果、友人関係の活動的側面を測る尺度では閉鎖的活動の因子が親密確認活動と共有活動の因子に別れたので、閉鎖的活動の因子は用いないこととした。その他の項目はほぼ想定通りの因子になったので、既存の尺度通りに用いることとした。日本版 BAQ は内集団に対しても、外集団に対しても、既存の尺度通りに因子が別れたので、そのまま用いることとした。

また、内的一貫性の確認として、各尺度と下位因子の  $\alpha$  係数を確認した。友人関係の活動的側面を測る尺度は .66 から .82、内集団における日本版 BAQ は .64 から .78、外集団における日本版

BAQ は .74 から .81 であり、やや低いものもあるが、内的一貫性はあると判断した。

クラスター分析による類型の抽出

因子分析の結果を受け、相互理解活動、親密確

認活動、共有活動の 3 つの得点を Z 得点に変換した上で変量とし、非階層的クラスター分析 (K-Means 法) を用いて類型の抽出を試みた (表 3 参照)。

表3 2-5 クラスター分類における各クラスターの最終クラスター中心

クラスター数		相互理解活動	親密確認活動	共有活動	n
2 クラスター	I	.54	.56	.62	72
	II	-.57	-.61	-.69	65
3 クラスター	I	.95	.40	1.23	35
	II	-.53	-1.12	-.92	40
	III	-.18	.50	-1.12	62
4 クラスター	I	1.43	.70	1.43	19
	II	-1.54	-1.10	-1.19	17
	III	.30	-1.02	-.65	28
	IV	-.11	.47	.15	73
5 クラスター	I	.37	-.20	.89	29
	II	-1.74	-1.03	-1.02	14
	III	.17	-1.22	-.95	23
	IV	1.57	1.09	1.44	14
	V	-.19	.59	-.18	57

クラスター数ごとの抽出されるクラスター中心の特徴を見ていく。2 クラスターから 3 クラスターにすると、クラスター I とクラスター II のそれぞれからサンプルが抽出されて新しいクラスターが生成された。2 クラスターでは特徴的な群がクラスター I とクラスター II に埋もれているため不適切であると判断した。また 3 クラスターから 4 クラスターにしたときは、3 クラスターにおけるクラスター II が 4 クラスターにおけるクラスター II とクラスター III に別れた。この 2 つのクラスターはどちらも親密確認活動と共有活動得点が低く、相互理解活動得点が平均より低いか平均付近かの違いであったので、この 2 群を分ける積極的な意味はないと判断した。これに加えて各クラスターに含まれる対象の数、クラスターの解釈可能性、理論的整合性を総合的に判断した結果、3 クラスターが妥当と判断した。図 1 は 3 クラスター時の友人関係の活動的側面を測る尺度の標準得点の最終クラスター中心を示したものである。各クラスターの特徴は次の通りである。

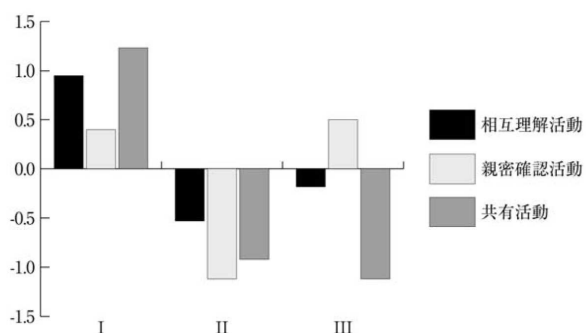


図1 クラスターの最終クラスター中心

第 1 クラスターは、相互理解活動と共有活動の得点が高く、親密確認活動もやや高いというのが特徴である。この群をピア優位群と名付けることにする。

第 2 クラスターは、3 つの得点ともに低いのが特徴である。この群を未熟群と名付けることにする。

第 3 クラスターは、相互理解活動は平均よりやや低め、共有活動は低いが、親密確認活動が 3 群の中で 1 番高いというのが特徴である。この群をチャム優位群と名付けることにする。記述統計は表 4 の通りとなった。

表4 性別・クラスターごとの相互理解活動・親密確認活動・共有活動の記述統計

		相互理解活動		親密確認活動		共有活動	
		M	SD	M	SD	M	SD
ピア優位群	男性 (n=16)	40.1	4.3	18.1	4.2	26.1	2.3
	女性 (n=19)	39.9	4.2	20.6	4.4	26.6	3.3
	合計 (n=35)	40.0	4.2	19.5	4.4	26.4	2.8
未熟群	男性 (n=15)	29.4	6.5	11.9	3.3	15.3	3.4
	女性 (n=25)	32.8	5.6	12.3	3.0	15.9	4.1
	合計 (n=40)	31.5	6.1	12.2	3.1	15.7	3.8
チャム優位群	男性 (n=19)	32.2	3.4	18.8	2.7	20.3	3.1
	女性 (n=42)	34.0	4.1	20.4	2.9	19.5	2.4
	合計 (n=61)	33.4	4.0	19.9	2.9	19.7	2.6
合計	男性 (n=50)	33.9	6.4	16.5	4.5	20.6	5.1
	女性 (n=86)	35.0	5.3	18.1	5.0	20.0	5.0
	合計 (n=136)	34.6	5.8	17.5	4.9	20.2	5.0

クラスターごとの攻撃性得点の差の検討

フロア効果の検討の結果、削除した項目があった。内集団と外集団で質問項目数が違うために、合計得点、下位尺度をそれぞれ Z 変換した。記

入漏れがあるものを除いた 129 名分を分析対象とし、クラスターごとに攻撃性得点を集計したところ、表5のようになった。

表5 Z変換後の性別・類型ごとの攻撃性の記述統計

		身体的攻撃		短気		敵意		言語的攻撃		攻撃性	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
内集団	男性 (n=16)	0.60	1.09	0.06	0.82	0.07	1.14	0.52	0.92	0.44	0.90
	女性 (n=18)	0.09	0.82	0.01	0.80	-0.38	0.91	0.22	0.80	-0.07	0.61
	合計 (n=34)	0.33	0.98	0.03	0.80	-0.17	1.03	0.37	0.86	0.17	0.80
未熟群	男性 (n=15)	-0.09	1.19	-0.31	0.94	-0.05	0.84	-0.27	1.23	-0.28	0.82
	女性 (n=22)	0.11	0.95	0.33	1.37	0.17	1.11	-0.13	1.10	0.22	1.30
	合計 (n=37)	0.03	1.04	0.07	1.24	0.08	1.00	-0.19	1.14	0.02	1.15
チャム優位群	男性 (n=18)	0.13	1.19	-0.15	0.97	0.50	1.11	0.02	0.96	0.23	1.08
	女性 (n=40)	-0.37	0.78	-0.03	0.95	-0.16	0.86	-0.15	0.94	-0.26	0.95
	合計 (n=58)	-0.21	0.94	-0.07	0.95	0.05	0.98	-0.10	0.94	-0.11	1.01
合計	男性 (n=49)	0.22	1.17	-0.13	0.91	0.19	1.05	0.09	1.07	0.14	0.98
	女性 (n=80)	-0.13	0.86	0.08	1.05	-0.12	0.95	-0.06	0.96	-0.09	1.01
	合計 (n=129)	0.00	1.00	0.00	1.00	0.00	1.00	0.00	1.00	0.00	1.00
外集団	男性 (n=16)	0.51	1.12	-0.03	0.73	0.24	0.90	0.40	0.96	0.47	0.78
	女性 (n=18)	0.41	1.10	0.30	1.03	-0.32	1.00	0.40	0.85	0.30	0.93
	合計 (n=34)	0.45	1.09	0.14	0.91	-0.05	0.98	0.40	0.89	0.38	0.85
未熟群	男性 (n=15)	-0.25	0.76	-0.23	0.76	0.09	1.11	-0.01	1.06	-0.17	0.90
	女性 (n=22)	-0.22	0.97	0.21	1.26	0.00	1.09	-0.38	0.95	-0.15	1.03
	合計 (n=37)	-0.23	0.88	0.03	1.09	0.04	1.08	-0.23	1.00	-0.16	0.97
チャム優位群	男性 (n=18)	0.05	1.26	-0.21	1.03	0.29	1.17	-0.02	1.12	0.07	1.15
	女性 (n=40)	-0.19	0.78	-0.06	0.99	-0.12	0.85	-0.12	0.97	-0.21	1.01
	合計 (n=58)	-0.12	0.95	-0.10	1.00	0.01	0.97	-0.09	1.01	-0.12	1.06
合計	男性 (n=49)	0.11	1.10	-0.16	0.85	0.22	1.05	0.12	1.05	0.13	0.98
	女性 (n=80)	-0.07	0.93	0.10	1.08	-0.13	0.95	-0.07	0.97	-0.08	1.01
	合計 (n=129)	0.00	1.00	0.00	1.00	0.00	1.00	0.00	1.00	0.00	1.00

攻撃性の方向と下位因子の種類を被験者内要因として性別とクラスターを被験者間要因とする 4 要因の混合要因分散分析を行った。その結果、4 次の交互作用は有意ではなく ( $F(6, 369)=0.50, n.s.$ )、性別とクラスターと攻撃性の方向の 3 次の交互作用が有意であった ( $F(2, 123)=3.28, p<.05$ )。下位因子の主効果 ( $F(3, 369)=0.22, n.s.$ ) は有意ではなかった。また性別とクラスターと攻撃性の方向の単純交互作用を検討したところ、①内集団への攻撃性における、性別とクラスターの交互作用が有意で ( $F=3.48, p<.05$ )、②未熟群における、性別と攻撃性の方向の交互作用が有意傾向 ( $F=3.45, p<.10$ )、③女性における、クラスターと攻撃性の方向の交互作用が有意であった ( $F=3.70, p<.05$ )。

それぞれの単純交互作用において単純・単純主効果を検討したところ (図 2 参照)、①ではピア優位群の内集団への攻撃性において男性が女性よりも高い傾向 ( $MS=4.15, p<.10$ )、男性の内集団への攻撃性におけるクラスター要因が 5% 水準で有意であった ( $MS=4.79, p<.05$ )。しかし、Ryan 法による多重比較では水準間に有意な差はなかった。②では未熟群の女性において、内集団への攻撃性が外集団への攻撃性よりも高い傾向だった ( $MS=1.85, p<.10$ )。③に関しては、②の差に加え、ピア優位群の女性において、外集団への攻撃性が内集団への攻撃性よりも高い傾向であった ( $MS=1.70, p<.10$ )。

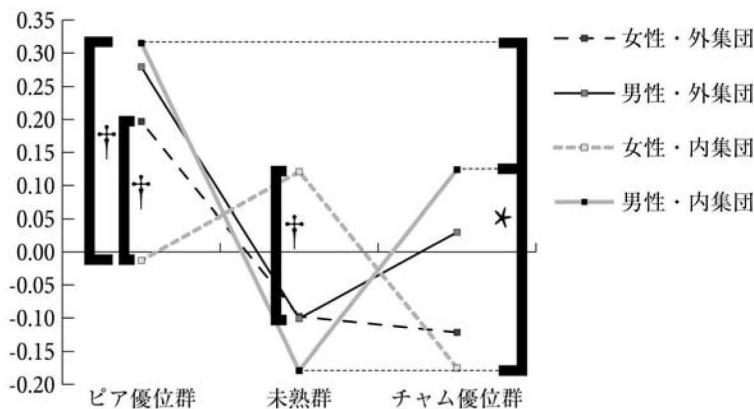


図 2 クラスター・性別・攻撃性の方向における攻撃性得点の単純主効果

相互理解活動得点, 親密確認活動得点, 共有活動得点から内集団・外集団への攻撃性への重回帰分析

内集団における、下位因子を目的変数とし、Step 1 で性別を投入し、Step 2 で相互理解活動・親密確認活動・共有活動得点の 3 つを投入する階層的重回帰分析を行った。内集団への身体的攻撃では、性別が 5% 水準で有意であった ( $B=1.18, \beta=.18, p<.05$ )。敵意では、性別が 5% 水準で有意であった ( $B=1.56, \beta=.17, p<.05$ )。言語的攻撃では、相互理解活動が 1% 水準で有意であった ( $B=.21, \beta=.38, p<.01$ )。

また、外集団における、下位因子を目的変数とし、Step 1 で性別を投入し、Step 2 で相互理解活動・親密確認活動・共有活動得点の 3 つを投

入する階層的重回帰分析を行ったところ、外集団への敵意では、性別が有意傾向であった ( $B=1.55, \beta=.17, p<.10$ )。言語的攻撃では、相互理解活動が 1% 水準で有意であった ( $B=.17, \beta=.28, p<.01$ )。

IV. 考察

仮説 1 の検討

仮説は、非階層クラスター分析で相互理解活動・親密確認活動・共有活動・閉鎖的活動を変数としたときにピアシップ得点が高い群とチャムシップ得点が高い群が少なくとも抽出されるであった。項目分析の結果を受けて閉鎖的活動の因子は使わずに分析を行い、結果は図 1 のようになった。この結果から、仮説 1 は概ね支持されたと言える。つまり、ピア得点を示す相互理解活動が高いピア

優位群、チャム得点を示す親密確認活動が有意に高いチャム優位群が抽出され、さらに、3 つすべての得点が低い未熟群が抽出された。

仮説で想定したものに加え、未熟群がさらに抽出されたことは、橋本<sup>10)</sup>の先行研究においても集団同一性の各位相得点がどれも低い未熟群が抽出されたことと同様のことを指していると考えられる。この群は理論構成で提示した同質的集団にも入ることができなかつた群と考えられ、3 つの得点ともに低くなっている。この群が抽出されたことは現代青年に仲間集団に所属する経験すら弱い群が一定数いることを示している。

### 仮説 2 の検討

仮説は、内集団への攻撃性と外集団への攻撃性得点を被験者内要因とし、性別と抽出されたクラスターを被験者間要因とする 4 要因混合計画における分散分析において、クラスターの主効果が有意で、チャム優位群がピア優位群より高くなるであろう、というものであった。

攻撃性得点全体を従属変数にしたところ、有意な交互作用・主効果が 1 つもなかった。したがって仮説は支持されなかった。Buss-Perry 攻撃性尺度<sup>1)</sup>は 4 因子から構成される。このうち、言語的攻撃は主張性を軸とした中和化された攻撃性を示すものとなっている。一方で、身体的攻撃、短気、敵意の 3 因子は攻撃性の中和化が弱い、攻撃性の暴発や攻撃性の表出などを測定している。つまり、発達的な視点から検討したときに、攻撃性の尺度として合計点を用いることに攻撃性の質の一貫性がなく相殺された可能性がある。攻撃性尺度の下位因子を従属変数とした分析が必要となる。この点は仮説 3 で検討を行う。

### 仮説 3 の検討

仮説は友人関係の活動的側面を測る尺度<sup>3)</sup>の下位因子である、相互理解活動・親密確認活動・共有活動・閉鎖的活動の 4 つを説明変数とし、攻撃性の下位因子である、身体的攻撃・短気・敵意・言語的攻撃の 4 因子を目的変数とする重回帰分析を目的変数ごとに行うと、内集団・外集団にお

ける攻撃性得点の下位因子である言語的攻撃得点は相互理解活動得点によって予測され、その標準偏回帰係数は正の方向に有意であろう、というものであった。

手続きの過程で友人関係の活動的側面を測る尺度の下位因子である閉鎖的活動は分析対象から外されたが、内集団への攻撃性・外集団への攻撃性を問わず言語的攻撃の因子が相互確認活動得点によって予測された。その標準偏回帰係数は正であった。つまり、相互理解活動が高い者は攻撃性を中和化して主張行動ができるということを示している。つまり、仮説 3 は概ね支持されたと言える。

一方で、親密確認活動と共有活動得点とは内集団・外集団ともに言語的攻撃得点を含むどの下位因子も予測しなかった。チャム優位群と未熟群の大きな違いは、親密確認行動得点であった。しかし、これは予測変数とはならなかった。つまり、チャム優位群と未熟群の違いで主張性を示す言語的攻撃得点は変動しないと考えられる。したがって、相互理解活動という個の独立性のみが必要条件となっていることが予想される。

さらに、内集団と外集団を区別したにもかかわらず、その差異はわずかなものであった。つまり、チャム優位群に関する理論構成とは異なり、内集団と外集団を分ける意味があまり見出せなかったことになる。これらを含めて、新たな研究デザインによる検討が望まれる。

### まとめ

本研究では仲間集団経験発達と攻撃性に関する先行研究を概観した上で、青年期後期を対象に年齢相応の仲間集団経験発達をしていてピアシップを発揮できる群と、ピアシップを発揮できない群でどのように攻撃性の様態が異なるのかを検討することを目的とした。先行研究の知見を元に以下のように仮説を設定した。ピアシップが発揮できない青年では外集団との社会的比較の過程によって自尊心を保とうとするので攻撃性は高まり、攻撃性の表現は中和化できないだろう。一方、ピアシップが発揮できる青年は、社会的比較に頼らなくとも自尊心を保持でき、攻撃性の表現が鍛錬され

れているので内集団・外集団に関わりなく攻撃性は中和され、能動性や積極性といった形で発揮できるだろう。その結果、ピア優位群は攻撃性を中和化して主張性として用いることができることが示された。これは本研究において、仲間関係発達の成熟と攻撃性のとり扱い能力の関係性を示すものと言える。

ピアシップを発揮できる群は攻撃性の中和化を予測できることが明らかになった点が成果である。これは、先行研究において仲間集団発達と攻撃性の関連を検討した研究が少ないことを考えると、この領域の布石となる結果を提出できたものとする。

今後の課題としては、量的な検討によって浮かび上がった結果を質的な検討、あるいは事例研究などを通して、より精緻なメカニズムを明らかにすることである。集団同一性理論は以前の発達位相が積み重なることを想定している。一方で、今回の結果は相互理解活動のみが予測因子となった。また、自尊心保持のための社会的比較のメカニズムなどは今回のデータでは支持されなかった。このメカニズムはさらなる研究で明らかにしていく必要がある。

## V. 結論

質問紙調査の検討から、ピアシップが発揮できている青年は攻撃性を中和化して用いることができることがわかった。仲間集団発達と攻撃性の取り扱いの関連性を示す結果となった。一方で、内集団と外集団を区別する意味はあまり支持されず、社会的比較についての理論仮説はさらなる検討が必要である。

## 付記

本論文は、国際基督教大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。指導教員であった国際基督教大学名誉教授小谷英文先生には、記して、深謝するものである。

## VI. 引用文献

- 1) 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子 (1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討. *心理学研究*, 70(5), 384-392.
- 2) Blanck, G. (1984). The complete oedipus complex. *The International Journal of Psychoanalysis*, 65, 331-339.
- 3) 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化. *教育心理学研究*, 47, 180-190.
- 4) Freud, S. (1920). Beyond the Pleasure Principle. In *Standard editions of complete psychological works*. London: Hogarth Press. 18 vols.  
(フロイト, S. 井村恒郎他 (訳) (1970). 快感原則の彼岸. フロイト著作集 6. 人文書院.)
- 5) Gavin, L. A. & Furman, W. (1989). Age difference in adolescents' perceptions of their peer groups. *Developmental Psychology*, 25(5), 827-834.
- 6) Hartmann, H. (1952). The mutual influences in the development of ego and id. *Psychoanalytic Study of Child*, 7, 9-30.
- 7) 橋本和典・西川昌弘・河野貴子 (1999). E. H. Erikson の集団同一性概念の治療的仮説構成. *集団精神療法*, 15(1), 63-72.
- 8) 橋本和典 (2008). 男性の成熟性—集団同一性から自我同一性の成熟. 小谷英文 (編). *ニューサイコセラピー—グローバル社会における安全空間の創成*. 風行社. pp. 65-88.
- 9) 橋本和典・高田 毅 (2010). 受益者 集団・組織・社会. 小谷英文 (編) *現代心理療法入門. PAS 心理教育研究所出版部*. pp. 72-81.
- 10) 橋本和典 (2011). 青年版集団同一性質問紙 (GIS-A) の作成—信頼性・妥当性の検討—. *国際基督教大学教育研究*, 53, 69-77.
- 11) 保坂 亨・岡村達也 (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討. *心理臨床学研究*, 4(1), 15-26.
- 12) 小谷英文 (1991). 思春期における集団の力と意味. 月間生徒指導, 6月, 18-23.
- 13) 小谷英文・中村有希・秋山朋子・橋本和典 (2001). 青年期アイデンティティグループ—性愛性と攻撃性の分化統合を中核作業とする技法の構成—. *集団精神療法*, 17(1), 27-36.
- 14) Kotani, H (2003). Counseling and psychotherapy – to make them more effective for difficult adolescents –. *International Journal of Counseling and Psychotherapy*, 1, 5-17.